【特集：『意味の論理学』を本質変形する】

海の原理とストア派――LS 動的発生論のストア派的読み換え

内藤　慧

0. はじめに

『意味の論理学』（以下 LS）は一般に、そのタイトルに則して「意味」ないし「出来事」、そして「表面」を巡る哲学が展開された著作とみなされている（1）。だが、例えば『アンチ・オイディプス』において「唯物論的精神医学」の重要概念である「器官なき身体」の初出が LS であることからも明らかなように、LS の身体論・物体論的な側面は否定し得ない（2）。LS がエミール・ブレイエを経由したストア派由来の物体・非物体論を採用していることからして、非物体的次元と同様に物体の次元のプレゼンスは明らかなものと思われる。それではなぜ解釈上、「出来事」論の側面に力点が置かれるのか？これは何よりも、ドゥルーズ自身が一貫して、LS においてストア派の独創性を、非物体的なもの＝出来事の領域の発見として紹介しているからである(LS 第 18 セリー)。また、ドゥルーズが特に物体の深層領域として提示する第 1 次秩序を巡る議論は、明示的にはジゼラ・パンコフやメラニー・クラインによる精神分析の議論を参照しており、この観点からの第 1 次領域への分析は近年目覚ましい進展がみられる（3）。

しかし本稿としてはむしろ、ストア派のプレゼンスは第 1 次秩序と呼ばれる物体の深層領域にまで及んでいるものと考えたい。本稿が注目するのは第 1 次秩序における「器官なき身体」という物体の様態、およびそこにドゥルーズが導入する「海の原理」なる概念である。われわれはまず LS の基本的な構造を整理した後、第 1 次秩序がまずどのような物体的領域であるのか確認しつつ、そこにどの程度、どのような形でストア派のプレゼンスを認め得るのか、明らかにしたい。

1. LS の図式的整理

まず本稿の議論に必要な範囲で、簡単に LS という著作の基本的な図式を提示しておく。

LS は、基本的に 3 つの領域間で議論を展開している。

> 第 3 の配置から、第 2 の組織にまで遡らなければならない。その次に、力動的な要請に従って第 1 の秩序にまで遡らなければならない。(LS, 286)

①第 1 次秩序 ordre primaire：物体的深層の混合状態。表面はここから形成されるが、また常に表面はここへと堕ちるリスクを孕んでいる。原初的な原因。②第 2 次組織 organisation secondaire:表面とも言い換えられる、非物体的な出来事の領域。ここにおいて、実現の裏地としての反実現が成立し、思考が確保される。準―原因。③第 3 次配置 ordonnance tertiaire：個体化され、命題によって指示される物体の領域。規定された「事態」。まず単に序数ではなく primaire, secondaire, tertiaire,という語が採用されている点に着目したい。これらの語はそれぞれ古生代・中生代・第三紀(Ére primaire, Ére secondaire, Ére tertiaire)という地質学的な含意が認められ、そのことからある種の歴史的(人間的営みの範疇を超えた)な諸態勢として、この 3 領域が構想されていると考えることができる（4）。引用部にある通り LS の前半部(特に第 13 セリーまで)は、まさに第 3 次配置から第 2 次組織を浮上させ、さらに第 1 次秩序の存在を浮き彫りにする「遡り remonter」の過程として展開される。またそれが「遡り」である以上、事柄の順序としてはむしろ第 1 次秩序から第 2 次組織を経て、第 3 次配置へと至るということも明らかである。簡単に要約するならば、LS とは物体の深層のカオス的な領域(第 1 次秩序)から、規定され命題によって指示され得る経験的一般的な領域(第 3 次配置)が成立する歴史を、非物体的な出来事の領域(第 2 次組織)を介して考察するものだと言えるだろう。さて、この 3 つの領域について指摘される「物体」や「非物体的」とはどういうことなのか。ドゥルーズは LS 第 2 セリーにおいて、エミール・ブレイエに依拠しつつ、ストア派における物体と非物体的なものとの区別に言及する。

> 物体の厚みに対して、草原の霧のように表面でだけ上演される非物体的な出来事を対立させる時、ストア派は何を言わんとしているのか？物体の中、物体の深層の中にあるものとは、混合である。ある物体は別の物体に入り込み、そのあらゆる部分において共存する。海の中のワインの一滴、あるいは鉄の中の火のように。…混合は一般に、量的かつ質的

な事態を規定する。…しかし「拡大すること」「減少すること」「赤くなること」「緑になること」「切ること」「切られること」などによってわれわれが言わんとしているのは、別の事柄である。それはもはや事態や物体の底での混合ではなくて、混合に由来する、表面における非物体的な出来事である。(LS, 14-15)

まず物体として考えられているのは「混合」と、それが規定する量・質的な「事態」とである。まず簡単にストア派において、これらの語がそれぞれどのような事柄に対応しているのか確認しておきたい。ストア派の自然学において、物体は受動的な原理としての質料と、それに形を与える能動的な原理としてのロゴス＝神からなる(SVF,Ⅱ,300.＝HP, 44B.)。前者に対する後者の働きかけから宇宙が構成される(SVF,Ⅱ,309-310.=HP, 45H)。さてここで、受動的原理としての質料と能動的原理としてのロゴス＝神は、後者が前者の内に混じり合っていると説明される（5)。しかし、同じく物体である２つの原理が相互浸透し混じり合うことがいかにして可能なのか？同じ座標上に異なる物体が同時に存在することがどうして可能なのか？これを説明するのが、この２つの原理の間に指摘される「混合」という状態である(SVF, Ⅱ,473.=HP, 48C)。例えば、大量の水に溶けたワインを油に浸した海綿を用いて抽出できる、という事例が説明するのは(SVF, Ⅱ,471.=HP, 48D.及び SVF,Ⅱ,473.=HP, 48C)、ワインと水とが同じ場所にあって浸透しつつも互いの特性を維持し続ける、という「混合」概念の様態である。さて、２つの原理の結び付きを語る「混合」について、ドゥルーズはそれが「事態」を規定すると考える。確かに物体が量的質的な状態を持つのは、能動的原理と質料とが「混合」を成すことを通じて、ロゴス＝神によって質料が規定されるからだと考えるならば、「混合」が「事態」を規定する、という説明はある程度理解できるだろう（6)。LS における物体にはこのように、量的質的な「事態」と、それを規定する「混合」とが考えられる。

「非物体的」と言われるものは、これらの物体とは徹底的に区別される。例えば「メスが肉を切る」という命題が指し示す事態を考えてみよう（7)。まずメスや肉はそれぞれ量的質的な物体であり、メスに肉片が付着しているという状態、肉が切られているという状態も同様に物体である。ところでブレイエによれば、メスと肉の物理的な接触、およびそこから生じた各々の新たな状態(肉片の付着、切られている)は、何か新しい物体(状態)を生み出しているわけではない。それではこの事態にとっての結果とは何なのか？ブレイエによれば、それはメスや肉、物体同士の運動から引き続く各々の物体の状態とは区別される、「切られる」という、非物体的な「新たな属性」である（8)。この「新たな属性」はメスや肉に直接作用するものではなく、ドゥルーズはこれをある種理念的な「出来事」だと語っている。LS 第８セリーで「理念的なプロテスタンティズムと現実のルター主義」という対比を挙げながら、ドゥルーズは量的質的に実現された事故と、それとは区別される理念的なものとしての「出来事」とを区別しつつ(LS, 68-69)、後者の領域を前者の産出に関わる超越論的領野として規定する。量的質的なものが経験的な次元に位置付けられ、対して超越論的なものがそれと類似しない、という教説は『差異と反復』を中心にドゥルーズ哲学の基本的な立場だと言えるが、LS においては物体と隔絶した「非物体的」なものというカテゴリーが、経験的なものと類似しない超越論的領野へと重ね合わされているのである。

ストア派並びにブレイエを経由してドゥルーズは以上のように物体と、非物体的なものとを区別していたわけだが、これらは先に確認した LS の３領域とどのように対応するのか？まず、既に確認したように、第１次秩序および第３次配置は共に物体の領域であり、第２次組織は非物体的なものの領域とされる。第３次配置が物体における量的質的な実現の領域であり、第２次組織は出来事の属する超越論的領野に該当しているため、一見するとこれら３領域は徹頭徹尾ストア派的な物体・非物体論の観点から整理することができるように思われるかもしれない。しかしとりわけ第１次秩序を巡って、このような単純な対応関係を指摘することは難しくなる。序で言及した通り、第１次秩序を舞台に展開される「動的発生」論にあって、ストア派ではなく精神分析の枠組みが前面に押し出されていることからも明らかなように、ストア派の自然学とドゥルーズが第 1 次秩序として描き出す物体的深層の世界は、そのまま対応しているとは言い難い。次章では、まず精神分析的な枠組みにおいて論じられる第１次秩序としてのカオス的な物体的深層の領域について、その構成を確認する。この中で本稿が注目する「海の原理」概念が登場する。

2. 第１次秩序と「海の原理」＝「湿の原理」の機能

さて、われわれは第１次秩序に関して、簡単にカオス的な物体的深層の領域として規定したが、ドゥルーズが明示的にこの領域に言及するのは第 13 セリー及び第 27 セリーである。本稿ではこの２つのセリーにおける当該領域を巡る記述を確認することで、まず第１次秩序とはどういう領域で、どのような構成になっているのか、整理する。その上で、そこで「海の原理」概念がどのような機能を果たしているのか確認する。

アルトー曰く、それは表面でしかない。アルトーの天才に命

を吹きこむ啓示、どんなに些細な分裂症者でも認識し、自分のやり方で生きている啓示とは、「自分には表面がない、もはや表面はない」だ。アルトーからみて、キャロルが底のあらゆる問題から保護され気取っている少女と映らぬはずがあろうか。分裂症的な最初の明証とは、表面が裂けたということである。もはや事物と命題の間に境界はない。(LS, 106)

LS の議論は文学と密に結び付いており、先の 3 領域にはそれぞれ異なる言語的形態が対応させられる。ここでルイス・キャロルの詩や言葉遊び(例えばカバン語「スナーク」)は第 2 次組織、つまり表面ないし出来事の領域に対応し、第 1 次秩序に位置付けられたアルトーの言語がこれに対立させられている。ただの音声が何がしかの言語として聞き取られるような、経験的な領域としての第 3 次配置が成り立つのは、事物と命題の間に境界があるからである。表面と呼ばれる第 2 次組織は、物体のみが存在する世界において、非物体的なものの領域、言い換えれば意味の領域を確保することで、この事物と命題の間の境界を設定し、われわれの一般的言語的な経験を成り立たせている。分裂症者アルトーに托される第 1 次秩序は、第 3 次配置を成り立たせる第 2 次組織である「表面」が、ない、という啓示によって特徴付けられる。それでは実際、「表面がない」領域とはどのような領域なのか？第 13 セリーは、もはや物体と区別されない言語様態を 2 つ提示し、第 1 次秩序を描き出している。

①ざる（9）状の身体（寸断された身体）

分裂症的な身体の第 1 のアスペクトとは、ある種のざる状の身体 corps-passoire である。フロイトは分裂症者の特質として、表面と皮膚に無数の小さな穴が開いていると捉えることを強調していた。この帰結として、身体はもはや深層以外のものではなく、あらゆるものを、基礎的な退行を表象する大口の深層へと運び去り、捕えてしまう。一切が物体であり、物体的であり、一切が物体の混合であり、物体の中へのはめ込みと浸透である。 (LS, 106)

「表面がない」分裂症的な第 1 次秩序はまず、「ざる状の身体」として提示される。フロイトが「無意識について」で紹介する「表面と皮膚に無数の穴が開いている」という感覚を、ドゥルーズは表面をなくした第 1 次秩序における分裂症的な啓示として文字通りに捉える。つまり無数の穴が開き、ざる状になった皮膚はもはや一身体と他の物体とを事実上、言語上区別する境界としては機能せず、それゆえにあらゆる物体は、相互に嵌り込み浸透する混合状態を呈することになる。その結果として第 1 次秩序においては、「いつも別の身体が、われわれの身体の内に浸透し、その諸部分と共存する」と語られる。「ざる状の身体」として語られる第 1 次秩序の第 1 のアスペクトとは、言うなればカオス的な、一切の物体の混合状態である。そして、崩壊したのは身体表面であると同時に言語的表面でもあり、ドゥルーズは同時に言語の問題としてこの混合状態を記述する。ドゥルーズによれば、第 1 次秩序において「あらゆる語は物理的で、身体を直接触発する」(LS, 107)。例えば第 3 次配置において「やあ！ディオン。」という呼びかけの命題は（10）、ディオンなる人物に差し向けられた言語として聞き取られる。ストア派はここに非物体的なものとしての「レクトン」の作用を指摘し、ドゥルーズはこの非物体的なものを第 2 次組織として、第 3 次配置の成立を物語るのだが、表面がなくなった第 1 次秩序において当の命題は「yah・di・on」という音の連なりに解体され、もはや言語として聞き取られることはない。このように単なる音に解体された言語は、他の物体と同様に身体を直接的物理的に触発することになる。それゆえドゥルーズは第 1 次秩序に関して、「木や花が身体を貫いて伸びる」と語ると同時に、「語の断片が身体の内に押し入る」とも語るのである(LS, 106-107)。このように、言語をも巻き込んだ物体のカオス的混合状態、これが第 1 次秩序の第 1 のアスペクトとしての、「ざる状の身体」である(これは第 13 セリーにおいて「寸断された身体」corps-morcelé とも言い換えられており、本稿で以降両者を同じものとして扱う)。

②器官なき身体

このとき、分裂症者にとっての問題とは、意味を修復することよりも、常に裂けた表面の下にある深層にあって、語を破壊すること、情動を払いのけること、物体の苦しい受動を勝ち誇る能動へと変容させること、服従を命令にすることである。…今では勝利は、そこですべての文字価値、音節価値、音韻価値が、書かれることのない音調的価値によって置き換えられるような、語―息、語―叫びを創設することによってのみ獲得され得る。この音調的価値には分裂症的身体の新たな次元としての栄光の身体、一切を送風、吸気、気化、流体伝動によって行う部分なき有機体が対応する（アントナン・アルトーの高次の身体 le corps supérieur ないし器官なき身体 corps sans organes）。(LS,105)

さて、「寸断された身体」としての第 1 次秩序において、言語もろ

とも一切の物体が混合状態に陥った時、分裂症者にとって問題となるのは「意味を修復すること」、つまり事物と命題の境界を再建することではなく、「身体の苦しい受動を勝ち誇る能動へと変容させること」である。この問題設定の先に、「分裂症的身体の新しい次元」としての「器官なき身体」が位置付けられている。それでは、この「受動を能動へと変容させる」という操作はどのような事柄を指して語られているのか？語―息、語―叫びの創設、とは何を意味しているのか？ドゥルーズが参照しているのは、アルトーによるキャロルの翻訳の試みである。

> この能動の方式は以下のものによって実践的に定義される。子音、喉音、有気音を過剰に詰め込むこと、内部省略記号と内部アクセント、呼吸音を入れること、音節を区切ること、一切の音節価と文字価を置き換える抑揚。語を分解不可能、崩壊不可能にするように、語によって能動を為すことが問題である。分節なき言語。ここで、セメントとは非―有機的な湿の原理、海のブロック、海の多量である。(LS,109)

> アントナン・アルトーが、彼の「ジャバウォック」で Jusque-là où la rourghe est à rouarghe à ramgmbde et rangmbde à rouarghambde:と語るとき、問題となっているのは語を活性化し、語に息を吹き込み、語を濡らしたり燃やしたりして、語が寸断された身体の受動にならずに、部分なき身体の能動になるようにすることである。(LS,110)

« Jusque-là où la rourghe est à rouarghe à rangmbde et rangmbde à rouarghambde: »とは、アルトーがルイス・キャロルの「ジャバウォック」を翻訳する中で、明確に文章構造を逸脱し始める点に位置する文章であり、キャロルの原文に対応する文章は存在しない。この文章が、「寸断された身体」に対置される「器官なき身体」としての分裂症的身体ないし言語の様態を示しているとされる。ドゥルーズが指摘するのは、この文章を構成する造語(例えば rouarghe や rangmbde など)に関する子音等々の「過剰な詰め込み」surcharges であるが、この操作が目指しているのは、「語を分解不可能、崩壊不可能にする」ことであり、それが「分節なき言語」とも呼ばれる「器官なき身体」状の言語様態を形成すると考えられる。先に「やあ！ディオン。」が「yah・di・on」に解体される、という例で示した通り、「寸断された身体」において語は他の物体と同様に、解体され、境界を失い、一切の物体との混合状態を呈するのであった。対して「器官なき身体」状の「分節なき言語」において強調されるのは、「分解不可能性」であり、ここに両者の対立点がある。つまり一口にカオス的な物体的深層といっても、第１次秩序にはバラバラに解体された「寸断された身体」と、分解不可能にされた「器官なき身体」という、対立する２つの極が認められるのだ。ところで、本稿では「器官なき身体」の分解不可能性を成り立たせる「セメント」として、「湿の原理」なる概念が登場することに着目したい。この語は直前の箇所では「海の原理」として登場しているが、一切の物体が断片的な「寸断された身体」と、「器官なき身体」の間、前者を経て後者が獲得される過程において、後者を特徴付ける「分解不可能性」の原因と目される以上、重要な概念だと考えられる。実際ドゥルーズは、２つの極を対置しつつ、以下のように述べる。

> 分裂症には、変質させる部分的混合と、身体を手付かずのままにする全体的で流体的な混合という、2 つの物体的混合の間のストア派的な区別を生きる仕方というものがある。液体的な要素ないし吹き込まれる流体の内には、「海の原理」である能動的混合の書かれざる秘密があり、はめ込まれた部分の混合に対置される。(LS,109)

「ざる状の身体」は 部分的混合、「器官なき身体」は流体的混合に対応し、この２つの極の間には「ストア派的な区別」があるとされる。ドゥルーズは十分な解説を行っていないが、ストア派の物体論には受動的原理としての質料と、能動的原理としてのロゴスの対立がある。２つの極の「受動」、「能動」の対立が「ストア派的区別」と呼ばれているのは、このような事情によってであろう（11）。この流体的混合にとっての「書かれざる秘密」として「海の原理」が言及され、先に見たように、これが分解不可能性を生じさせるセメントと呼ばれているからには、少なくとも２つの極の間で「海の原理」が転換点を為していると考えるべきだろう。つまり、これを介して受動的混合から能動的混合としての「器官なき身体」が成り立つ、というべきだろう。強く言えば、LS における「器官なき身体」の成立には、「海の原理」の存在は不可欠である。

一旦整理する。第３次配置を成り立たせる第２次組織たる表面は確固たる不変の秩序などではなく、この表面が崩壊した領域として第１次秩序は考えられる。アルトーになぞらえて分裂症的とも形容されるこの物体の領域には２つの極があり、その一方はまさに皮膚表面に無数の穴が開き「ざる状」になってしまった結果、語もろとも一切の物体が解体しバラバラになって混合をなす「寸断された身体」として提示される。対するもう一方の極は「器官なき身体」と呼ばれるが、それは特殊な操作を経て分解不可能性を獲得することで、「寸断された身体」において置かれていた諸々の物体の受動状態を、能動状態へと変容させることで獲得される

のであった。本稿ではこれから、第１次秩序における２つの極の間で機能する、「海の原理」ないし「湿の原理」に着目し、論述を進めたい。

3. 「海の原理」＝「湿の原理」とストア派的混合

さて、「海の原理」を巡ってはいくつかの参照項が想定される。①キャロル翻訳の試みに関して、アルトー自身が「海の原理」という語に言及している（12）。：第 13 セリーにおける当該概念の参照項としては、最も直接的なものと考えられる。とはいえ本稿としては、文学的な参照項をどの程度哲学の文脈において価値付けてよいのか、という方法論的な問題に対して筆者は解答を持ち合わせていないため、扱わない。②メラニー・クラインに代表される「尿道期」のテーマ。：第 27 セリー以降、つまり「動的発生」論までを視野に、「海の原理」・「湿の原理」を説明するならば、まずクライン的な枠組みを採用することが自然に思われる。本章でも簡単に言及する。③ストア派における混合概念との関わり：本稿が強調したいのは、この立場である。ドゥルーズは「海の原理」を巡って、いかなるストア派のテクスト、ならびにストア派研究も参照先として明示してはいない。しかし第 1 次秩序の 2 極性を巡って「ストア派的区別」なる表現が用いられ、その直後に流体的混合の「書かれざる秘密」として「海の原理」が言及されている以上、本稿としてはストア派的な文脈からの説明を試みる価値はあるのではないかと考える。実際ドゥルーズ自身が言及していないとはいえ、ブレイエの『哲学史』にはストア派の物体論を巡って「海」を巡る記述が存在している。「器官なき身体」が「流体的」混合と語られる点には、クライン的な尿道の主題と別に、ストア派的な「海」の主題を指摘することができると考えられる。本章はまず②の観点から、第 1 次秩序を精神分析的な枠組みに置き直して「海の原理」ないし「湿の原理」を巡る記述を整理する。その上で③の観点から、その背景に指摘されるストア派的な文脈を再構成し、LS 全体におけるストア派のプレゼンスを見積もりたい。

まず前提として、ドゥルーズが第 13 セリー註 10（LS, 111）においてジゼラ・パンコフ『身体像の回復』に言及している点を確認しておきたい。ここに、第 1 次秩序における 2 つの極の概念化に際して、パンコフが紹介する 2 つの身体像がベースになったことが窺える。その一方は「花の姿をとった人間の像」と呼ばれる、性的に未分化の身体と花と結合像であり、これに「対応する極」として胸部以下の存在しないのっぺらぼうの頭部像が紹介される。パンコフは前者の内に展開可能性を見る一方、後者には「何者かになるという可能性を失ってしまっている身体」という否定的な評価を与えている。つまりパンコフの議論において「器官なき身体」に該当する身体像は否定的にしか評価されていないのだが、上述の註においてドゥルーズはパンコフによる「器官なき身体(頭部)」に対する過小評価に批判を加えている（13）。パンコフとドゥルーズの間で、2 つの身体像の価値付けは反転しており、このことから、2 つの極がパンコフの 2 つの身体像に由来するとしても、「海の原理」を介した前者から後者への移行という議論を肯定的に論ずる観点を、パンコフに還元することはできない。

(パンコフ邦訳 p.107 及び p.115)

さて第 27 セリーを確認すると、ドゥルーズは「動的発生」論の第 1 段階として、第 1 次秩序をメラニー・クラインにおける妄

想―分裂ポジションに引き付けて論じている。LS における妄想―分裂ポジションの定義とは「部分対象の世界」「シミュラクルの世界」である(LS, 218)。妄想―分裂ポジションの主人公は乳幼児であり、彼／彼女にとって世界に存在するものは摂取の対象としての食べ物だけである。とはいえ一切がニュートラルに価値付けされるのではなく、部分対象は幼児を養い、快を与えるか否かという規準で、善い対象と悪い対象とに区別される。もっとも、妄想―分裂ポジションにおいて幼児は差し出される諸々の部分対象を結合して、一つの人格へと結び付けることはできないため、自身に快を与える善い対象を、それが存在しなくなり自身に快をもたらさなくなれば、悪い対象とみなしてしまう（14）。例えば乳の出る乳房は善い対象、出さなければ悪い対象であり、同じ一人の母親の部分としての認識は成立しない。加えてドゥルーズは、妄想―分裂ポジションにおいて、摂取されるものは等しく悪いものであると断定する。「完備なものだけが善いものであり、摂取はまさに無傷なものをそのまま存続させない」(LS, 219)とある通り、ドゥルーズはもはや善い対象を単に快を与えるものをとみなすのではなく、摂取され得ないものとして考える。つまりクラインにおける 2 つの対象の善悪が快を規準としているならば、ドゥルーズはこれを摂取の可否という規準から考えている。妄想－分裂ポジションが摂取される部分対象の世界であるならば、ドゥルーズにとって善い対象は端的に妄想―分裂ポジションの外に位置付けられると言えるだろう。そして、快不快から摂取へと軸をずらすことで、善い対象はもはや妄想―分裂ポジションの外に位置付けられるに際して、悪い部分対象に対置されるのは、一切の摂取を放棄した身体としての「器官なき身体」である（15）。「器官なき身体」は摂取を放棄し、悪い対象から身を守り、完全性を維持することで、妄想―分裂ポジションの外、高所に位置付けられた善い対象に対して、「完全性と統一性」という形態を与えることになる(LS, 221)。ここから抑鬱ポジションへの移行が可能となるため、動的発生論には「シミュラクルの世界」から「器官なき身体」への移行が論じられていると言える。このように、対象の善悪を巡って「摂取」に注目した読み換えがなされているとはいえ、「寸断された身体」から「器官なき身体」へのベクトルは、悪い部分対象と、善い対象に完全性を与える器官なき身体との対立に対応しているように思われる。

さて、それでは「動的発生」論において、「海の原理」ないし「湿の原理」の位置付けはどうなっているのか？ドゥルーズは摂取される部分対象と、摂取を放棄した器官なき身体の対立を以下のように言い換えている。

> 対立するのは 2 つの混合、すなわち硬く堅固だが、変質する断片の混合と、溶解し接着する特性を持つが故に、部分も変質もない完全な液体的流体的な混合である。(LS,220)

断片の混合は悪しき部分対象に対応し、かつ第 13 セリーにおける「寸断された身体」に対応する一方で、流体的な混合は摂取を放棄した「器官なき身体」に対応すると同時に、これは第 13 セリーにおいて「海の原理」をセメントとして分解不可能性を獲得した「器官なき身体」でもある。「動的発生」論では肛門期に対する尿道期の区別という観点から、尿が摂取による断片化を乗り越えるための「湿の原理」を立証するとされる(LS, 220)。しかし、クラインの議論のみからでは、なぜ 2 つの混合の間の移行を「湿の原理」が可能とするのか、立証することは難しい。そもそも、尿道期にこのようなカオス的な物体次元における意義を与える読み筋は、どこに起源を求めるべきか。われわれはこれを、ストア派における「海」の主題へと連結したい。動的発生論においてストア派は後景に退いたかに見えて、実際のところ 2 つの混合の間の「書かれざる秘密」としての「海の原理」という観点こそが前提として機能しているのである。

さて、ストア派における混合とは、先述の通り、異なる物体間での相互浸透を説明するものであったが、この相互浸透が、互いの性質を維持したままに混合をなすという点がその独創性として指摘される。

> それらがその通りである以上、ある種の物体もまた、その団塊が比較的小さくてそれ自体ではそれほど広がりつつ固有の本性を維持することができなくても、互いに助けを受け合うことによって、それ自体固有の性質とともに維持されつつ、全体が全体にわたって相互浸透する仕方で、互いに完全に一体化していることに何の不思議もないと彼らは言うのである。それと同様に、柄杓に一杯のワインが大量の水で薄められても、水の助けを得て広範囲に延び広がるのだから。(SVF,Ⅱ,473.=HP, 48C)

ドゥルーズが「海の中のワインの一滴」として語ったのは、上記の断片に示された水とワインの関係についてであり、このように異なる物体が性質を維持したままに相互浸透することができるが故に、スポンジを用いてワインと水を分離することができる、とする断片も存在する(SVF,Ⅱ,471.=HP, 48D)。「海の原理」なる概念がストア派の以上のような混合概念を示唆しているとするならば、第 13 セリーにも、第 27 セリーにも登場する「流体的混合」という概念は、ストア派における上述の混合概念と一致すると考えてよいだろう。断片的な混合に対置される、分解不可

能性を獲得した混合とは、このような混合概念における相互浸透の教説の観点から読み解くことができるだろう。「寸断された身体」から「器官なき身体」の獲得、受動から能動への変様とは、このようなストア派的混合の獲得の試みだった、と言えるのではないか。

一つ注意すべきこととして、少なくともこれらのストア派の断片の原文において、ワインが溶ける先はあくまで水であって、それが「海」であるとは明言されていない。なぜドゥルーズはこれらの教説を「海の中のワインの一滴」として語っているのか？つまり「海」という文言はどこに由来するのか？本稿はここで、LS において直接参照されているわけではないのだが、ブレイエの『哲学史』における以下の記述を提示したい。

> ワインは、大量の水に混ぜられ、浸透する。たとえ大量の水というのが海の全体だとしても。(*Histoire de la philosophie 1, Antiquité et Moyen Age*, PUF, 1931. p.274.)

この記述では、上述の断片を参照先として提示しながら、ブレイエ自身によって「海」という文言が付け加えられている。そうすると、ドゥルーズ自身はストア派の原文ではなく、ブレイエの上述の記述を通じてストア派の混合を巡る教説を、「海」の主題の基に理解している、という推測が成り立つ。ストア派の物体論を「海」の問題として解釈すること自体が、ブレイエを通じて可能となる視点なのであり、かつこれが LS における「器官なき身体」にとって不可欠の項であるならば、改めてわれわれは LS におけるストア派のプレゼンスを、出来事論や表面論を超えて認める必要があるだろう。第 27 セリーにおいてドゥルーズは註の中で、やや唐突に以下のような記述を残している。

> 器官なき身体と液体的な特殊性が結びつくのは、湿の原理が、断片がブロックになるのを保証するという意味においてである。例えそれが「海のブロック」だとしても。(LS,220)

文脈としては肛門期と尿道期の差異を主張し、先のパンコフと同様にクラインをも批判する註であるが、ドゥルーズはここで「湿の原理」が保証する断片からブロックへの移行に関して、「海」という文言を付け加えている。まず「湿の原理が、断片がブロックになるのを保証する」という文言は、第 13 セリーにおいて語られた、「海の原理」をセメントとしてバラバラになった語が分解不可能性を獲得する、という事柄と同一のことを語っていると考えられる。さて、ここでブロックを巡って「海」なる文言が敢えて付け加えられる理由を、精神分析の文脈から説明することは可能だろうか？「たとえそれが fût-ce」云々と「海」を付言するドゥルーズに、同じく「たとえそれが fût-ce」云々と「海」を付言するブレイエが重なりはしないだろうか？基本的に精神分析の枠組みにおいて展開する「動的発生」論の註に、唐突に登場した「海」の文言は、ブレイエを通じてドゥルーズの内に刻まれたストア派的混合概念の痕跡だとは言えないだろうか。そうであれば、第 1 次秩序における一つの極としての「器官なき身体」を理解する上で、例えそれがどれほどに精神分析の枠組みにおいて語られているとしても、やはりストア派的混合概念のプレゼンスは疑いようもない。精神分析の用語のみを以って、LS における「器官なき身体」を定義するとすれば、当該概念の深い含意を見落とし単純化することになりかねないだろう。

4. まとめ

本稿が問題視したのは、LS を出来事論ないし表面論としてのみ評価する立場、そして LS におけるストア派のプレゼンスを、表面ないし超越論的領野を巡る議論へと矮小化する立場である。本稿はこれに対して、表面の破れた深層の物体領域である第 1 次秩序、そこにおける「器官なき身体」を巡る議論に、ストア派のプレゼンスをどれほど認めることが可能化、検証することを以って対立した。第 1 次秩序には対立する 2 つの極が見出され、その一方から他方へ、「寸断された身体」から「器官なき身体」への移行という論点が提示されていた。この移行に際してのキータームが「海の原理」であり、この文言は表面的にはクラインを参照項として解釈することができるが、その実態はブレイエを通じたドゥルーズのストア派受容に由来するものであった。それゆえ、この観点から、「器官なき身体」を巡ってストア派のプレゼンスを疑いようがない。

本稿は以下の補足的研究を必要としている。第 18 セリーから第 21 セリーにおいて、ドゥルーズは古代の自然哲学者たち、プラトン、そしてストア派をそれぞれに論じ、あたかも LS における 3 つの領域に対応しているかのように論ずる。深層、高所、表面というこの 3 つの領域は、しかし第 1 次秩序、第 2 次組織、第 3 次配置とは対応しない。とりわけ高所を巡って、このような単純な対応関係が認められないことは小倉 2018, 鹿野 2020 が指摘する通りである。われわれはこの箇所でストア派に関して指摘される混合の概念と、深層に対応する自然哲学者たちの混合概念とがどのような関係にあるのか、これが「寸断された身体」と「器官なき身体」とにどのように対応するのか、という点を明らかにする必要があるだろう。

註

1. 例えば Igor Krtolika, 2015.
2. 本邦においても鈴木泉 2000.は既に LS の言語論が身体的ノイズの次元までを含むことを指摘しているし、また千葉雅也 2013.は LS 後半部の議論を「シニフィアンを失った身体の哲学の一種」と明言している。
3. Swiatkowski, 2015.や鹿野 2020.を参照。
4. これらの語の含意に関しては地質年代とは別に、第 1 次産業・第 2 次産業・第 3 次産業という含意を見て取ることもできる。いずれにせよ、単なるナンバリングという以上の含意を認めて然るべきだろう。*Le grand Robert de la langue française*, deuxième édition, 2001. tome 5, p.1196. 及び tome 6, p.287-288, p.1151.をそれぞれ参照。
5. Michel J.White, 2003, p.133.
6. 実際にものを規定する役割を担うのはロゴス＝神であり、「混合」はロゴス＝神が質料を規定する際の仕方である以上、「混合」が「事態」を規定するというドゥルーズの解釈は、やや特殊なものだと言えるだろう。
7. HP,55D 参照。
8. Bréhier, 1908, p.11-13.
9. Passoire とは水きり用のボウルのことで、調理器具としては「コランダー」などとも呼ばれるが、日本語としては「ざる」という表現が馴染むのではないか。passoire の訳語に関しては http://blog.livedoor.jp/kay_shixima/archives/52297205.html が有益な考察を行っている(2019/12/06 確認)。
10. ストア派の論理学が扱う命題とは、S is P 式の言語表現に限定されず、呼びかけや占い、呪いの類までを含む。また普遍的真理に関する命題以上に、限定的で真理値の変化し得る命題が事例として選ばれる。Susanne Bobzien, 2003, p.87. 及び Katerina Ierodiakonou, 2006, p.510.を参照。
11. もっとも、ストア派において受動と能動は原理の形容であって、混合の形容ではない。ストア派における混合は、この２つの原理の混合を意味している。このような論点を整合的に解釈するためには第 18 セリーから第 21 セリーまでの、ストア派を含むギリシャ哲学を巡る議論を再構成する必要があるが、これは別稿に委ねる。
12. Antonin Artaud *oeuvres*, p.927 post-scriptum (l'arve et l'aume)ならびに p.1013 ,lettres de rodez a henri parisot 22, septembre, 1945.
13. ジゼラ・パンコフ,1970. p.114.
14. Swiatkowski, 2015. p.36-37.
15. Swiatkowski, p.47

参考文献

Stoicorvm Vetervm Fragmenta, 1, 2, 3, edited by Hans von Arnim, Irvington Publishers, 1903-05.

A. A. Long, D. N. Sedley, *The Hellenistic Philosophers, Vol. 1; Translations of the Principal Sources, with Philosophical Commentary* ,Cambridge University Press ,1987.

Igor Krtolika, *Deleuze*, PUF, 2015.

Michel J.White, *Stoic Natural Philosophy (Physics and Cosmology),* in The Cambridge Companion to the Stoics, 2013

Émile Bréhier, *La Théorie des incorporels dans l'ancien stoïcisme*, Vrin, 1908.

Émile Bréhier, *Histoire de la philosophie ; L'Antique et le Moyen Age 2, Preriode Hellénisutique et Romaine*, PUF, 1967.

Susanne Bobzien, *Logic*, in *the Cambridge companion to stoics*, edited by Brad Inwood, Cambridge university press, 2003

Katerina Ierodiakonou, *Stoic logic,* in *A companion to ancient philosophy,* edited by Mary Louis Gill and Pierre Pellegrin. Blackwell Publishing Ltd, 2006, p.510.

Antonin Artaud *oeuvres*, 1945.

Piotorek Swiatkowski, *Deleuze and Desire: analysis of the Logic of Sense*, Leuven university press, 2015.

ジゼラ・パンコフ『身体像の回復―精神分裂病の精神療法』岩崎学術出版社,1970

千葉雅也『動きすぎてはいけない―ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出書房新社、2013 年

小倉拓也『カオスに抗する闘い ドゥルーズ・精神分析・現象学』人文書院、2018 年

鈴木泉「ドゥルーズ『意味の論理学』を読む―その内的組み合わせの解明―」『神戸大学文学部紀要』27、2000、p.47-76

鹿野祐嗣『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究ー出来事,運命愛,そして永久革命ー』岩波書店、2020 年